音楽の知覚と感受を結びつけた鑑賞の授業プラン

A Teaching Plan of Music Appreciation in School with attention to music perception and sensibility.

伊野義博[1)]・堀井キミ子[2)]
Ino Yoshihiro　Horii Kimiko

１はじめに

高等学校音楽科授業学習指導要領における鑑賞の指導事項として「声や楽器の特性と表現上の効果」「楽曲の構造」が挙げられている。ここでは、音楽の構造的な側面と感性的側面を相互に結びつけて、音楽の全体を味わって聴き取っていく能力の育成が求められている。すなわち、音楽の構造をとらえ、イメージ豊かに感じ取り，曲想を味わうとともに，それらを言葉などで伝えていく力である。

そのためには、音楽の要素を知覚し、それらの働きによる特質や雰囲気を感受する学習をもとに、音楽の全体を聴き取っていく授業を構成していく必要がある。

本稿は、こうした学校教育現場での課題から、新潟大学院教育学研究科音楽教育専修における授業「音楽教育学方法演習」において、高等学校１学年を対象に鑑賞授業を計画，実践したものである。

音楽から何かしらの感情を感じるにはそれ相当の理由があり、その理由は音楽の構造にある。本研究はこの「音楽の知覚と感受」にスポットをあて、両者を深く結びつけた音楽授業のあり方を模索したいという思いから始まった。音楽の構造的側面と感性的側面を結びつけることにより、生徒の音楽への理解は増し、鑑賞の能力が伸長される。

研究を行うにあたり、音楽のテクスチュアにおいて次のような前提を立てた。従来テクスチュアは音楽を一枚の布に例え、旋律の流れを横糸(水平方向)とするならば、要所での解決は縦糸(垂直方向)であり、この横糸と縦糸の組み合わせによりにより音楽が構成されていると考えるものである。

しかし今回提案したいのは、このテクスチュアの概念にさらに「奥行き方向」という概念を加えた三次元のテクスチュアで音楽を捉えていくということである。音楽を聴くとき、「遠くのほうから響いてくる感じ」や「だんだん近くに寄ってくる感じ」といった印象を受けたことがあるだろう。こうした「奥行き」方向に関する印象は、実は音楽の構造的側面の働きかけによって生じるものなのではないかと考えたのである。音楽を聴いてある印象を受ける。その印象は音楽の構造的側面の何によるものであるかと考える。このような音楽の構造的側面の知覚と感性的側面の感受が結びつけた授業が、鑑賞の能力を高めていく。

２　研究の目的

本研究の目的は大きく二つある。一つは「音楽の知覚と感受」の一体化した授業のモデルを示すことである。二つは、具体的に授業実践をし、生徒たちの学習の成果から、「音楽の知覚と感受」を結びつけた指導を行う際の問題点や改善点を見出すことである。

1) 新潟大学教育人間科学部
2) 新潟大学大学院教育学研究科

３　用語の定義

本研究を進める前提として、いくつかの用語とそれらの概念をまとめる必要があった。以下はその実際である。

3.1 「立体」

ここで示す「立体」とは「水平方向」・「垂直方向」・「奥行き」の三方向で成立しており、私たちはこれらを知覚感受しながら音楽を聴いている。

①水平方向：旋律の流れのことで、テクスチュアでは「横糸」にあたる。
②垂直方向：和音による支え、解決のことで、テクスチュアでは「縦糸」にあたる。
③奥行方向：「響きの位置や厚さ」と「密度や方向感覚」のこと。この奥行き方向の働きにより我々は音楽における「遠近法的感覚」を獲得することになる。

3.2 「遠近法的感覚」について

音楽を聴いたとき、「音が迫ってくる」・「音が遠ざかっていく」・「じんわりと下のほうで広がっていく」・「遠くへ駆け上っていく」といった感覚を明確に、あるいは漠然としながらも感じることは少なくないだろう。こうした感覚は音楽におけるテクスチュアの概念とは別物であると考えられる。本研究はこの感覚を音楽における「遠近法的感覚」と呼ぶこととする。これはさまざまな要素が複雑に組み合わさって生じる感覚である。従ってそれらの諸要素について整理する必要がある。大別すると以下の二つになる。

①各声部の音域及び音色

「響きの位置や厚さ」を表すものとする。これには倍音が深く起因している。単純に音域の低い声部は含まれる倍音が多いため、空間でその位置を表すとしたら低い位置に鳴る。また音そのものにある程度の厚さ備わっているというイメージができる。逆に高い音は厚みがなく、高い位置でなっているというイメージを持ちやすい。また各楽器の持つ特有の音色も、楽器の構造に加えて倍音の効果によりそれぞれの位置や厚さをイメージすることができるであろう。

②音価及び音の動き方

「音の密度や方向感覚」を表すものとする。例えば同じスケールでも短い音価と長い音価とで比較演奏してみるとその密度の違いを感じることができるであろう。またスケールとアルペジオを比較した場合、上昇感の違いを感じることができるであろう。

4　教材について

・平均律クラヴィーア曲集第２巻より　第２番　ハ短調(BWV871)　フーガ　／J.S.バッハ

J.S.バッハが今日における対位法の頂点を極めた人物であることは周知のとおりである。計算されつくしたフォルムとその中に感じられる絶妙な響きは正に「音楽の父」という名にふさわしい。やはりフーガを教材として取り上げるならば J.S.バッハの作品がそのよさを余すところなく伝えられるのではないかと考えた。また今回は限られた時間の中で知覚感受の充実を図りたいため、短く、そして生徒の要望にこたえられるよう何度でも再生可能な教材が求められていた。そこで『平均律グラヴィーア集 2 巻　フーガハ短調』を教材として取り上げることにした。

この曲は特徴的な旋律(横糸)が耳に残りやすい。またポリフォニー音楽ゆえに要所での解決(縦糸)が明確に示されていて生徒にも理解しやすい。そして何より音価・音高・音域・動き方等音楽の「奥行き方向」

が大変感じやすい作りになっているので、学習をスムーズに進めることができる。

一回の演奏に付き 3 分弱の時間しか要さないため、生徒は何回でも集中して聴取活動を行うことができる。また曲の前半は各パートの主題の出現がはっきりと聴取しやすいため、後半に仕掛けられている主題の多様な出現に音楽の面白さを十分に感じさせることができる。第 2 巻は練習曲としての性格が強い第 1 巻に比べ、より音楽性に富んだ内容になっている。このフーガハ短調も例にもれることなく音楽表現の豊かさを味わうことができる。

今回扱うフーガでは、主として以下の四点について指導するものとする。

①二種類の主題(提示主題及び応答主題)があること。
②応答主題は提示主題の 4 度上であること。
③提示主題の次に応答主題がくること。
④主題が各声部に出現すること。

音高の異なる主題が各パートに登場することで、主題に対してその都度、新たな印象・イメージを抱かせる。また提示主題の後に応答主題が登場することは、追いかけるような立体構造をイメージさせる。更にフーガの最たる特徴は、この二種類の主題を各パートでさまざまに形を変えて登場させる点にある。拡大・縮小・反転・逆行等により音価や主題そのものの動きが変化する。この時の印象・イメージをきちんと捉えさせる。

5　研究方法・評価方法

授業実践は 2007 年 5 月 28 日(月)及び 29 日(火)新潟県立新潟南高校の青柳秀昭教諭の協力の下、第 1 学年 6・7 組で行なった。このクラスは選択音楽履修者 34 人で構成されている。

授業実践はティームティーチング形式をとり、教師役・サポート役・ピアノ演奏者の三者で協力して行うこととした。授業実践はビデオ撮影を行った。生徒の反応は期間巡視や学習カードへの記入及び発言内容等により観察するものとした。これらを総括的に判断して授業実践の検証を行うこととした。

評価方法は主として学習プリントの記述から行い、生徒がどのような学習成果を得たかを明確にする。更に問題点や改善点を洗い出し、我々の当初の目的である「音楽の知覚と感受」を具現化したよりよい授業のあり方を検証していく。

本研究での題材の評価規準と具体の評価規準、具体的な実践内容及び学習プリントは以下に示す。

・題材の評価規準及び具体の評価規準

	観点①　関心・意欲	観点②　知覚・感受	観点④　鑑賞の能力
題材の評価規準	・楽曲の構造・三次元方向に働く力に関心を持ち、それによって音楽を立体的に捉えることに意欲的である。	・楽曲の構造・三次元方向の旋律の動きを知覚し、その特性からイメージを感じ取って、音楽を立体的に捉えることができる。	・楽曲の構造・三次元方向の旋律の動きがどのように作用しているかを聴き取るとともに、それらを総じて音楽の全体を立体的に捉えることができる。
具	ア　各声部にて音域の異なる	ア　音高の違いと旋律出現のず	ア　音価・音高・ずれ・他の声

体の評価規準	主題がずれて出現することに関心をもち、それらによって音楽の印象とその変化を捉えることに意欲的である。 イ　音価・音高・ずれ・他の声部とのかかわりなどを理解し、それらの組み合わせや変化により音楽のイメージが作られていること発見し、説明することに意欲的である。	れを知覚し、その特性からイメージを感じ取り、音楽の奥行き感を捉えることができる。 イ　音価の異なる旋律線やその方向を知覚し、その特性からイメージを感じ取り、音楽の奥行き感を捉えることができる。	部とのかかわりなどによる力がどのように作用しているかを聴き取るとともに、音楽の全体を立体的に捉えることができる。

①5 月 28 日第 1 時間目

時間	学習内容	○教師の支援・●指導上の留意点	評価
30 分	＜フーガの構造＞ ①フーガ c moll を聴き、感想・第一印象をワークシートに記入し、発表する。 ②提示主題と応答主題について学ぶ。 ・二種類の主題があること ・応答主題は提示主題の 4 度上であること ・提示主題の次に応答主題が来ること ・主題が各声部に出現すること	○机間巡視。 ●挙手を促し、様子を見て数名指名する。 ○13 小節目までを例に説明する。 ●楽譜の配布。 ○生徒の第一印象を元にフーガの学習に入る。実際にピアノを弾き、具体的な箇所を指摘しながら説明する。 ●特に音高の違いやテーマ出現のずれを中心的に見ていく。	①ア
15 分	＜奥行き感の学習＞ 音楽のテクスチュアを実際に確認する。 ・水平方向に進みつつ、垂直方向にも力が働いている(解決)ことを、楽譜を元に耳で確認する。	○何となく落ち着く感じがするところ(解決)を強調して示すことで曲が水平方向に進行しながらも垂直方向にも向っていることを感じ取らせる。	

この日はフーガの仕組みと「奥行き感」の導入部分の説明に終わったため、当初の計画からだいぶ遅れた。しかも言葉による説明が主になってしまったため、「音」による確認がおろそかになってしまった。フーガの構造は生徒たちも十分理解できていた。奥行き感の学習は少し困難で、特に「解決」の理解はあまり得られなかった。一日目の指導内容は「知覚と感受」においてはメインのものではないが、これが理解できていないと「知覚と感受」を結びつけることは難しい。なぜならこれがフーガの基本的なフォルムであるからだ。どの教材を扱うにせよ、基本となるフォルムをまずしっかり抑えなければならない。問題なのはそのフォルムをいかに簡潔に理解させ、「知覚と感受」の指導にスムーズに入れるかである。この点における教材研究が少し甘かった。

②5 月 29 日第 2 時間目

時間	学習内容	○教師の支援・●指導上の留意点	評価
5 分	＜前回の復習＞ ①通してフーガ c moll を聴く。 ②前回の学習の振り返り。	○OHP を使用しながら、前回取り上げた箇所に矢印などを書き込んでいく。	①ア ①イ
30 分	＜奥行き感の学習＞ ①「響の位置や厚さ」について ・各声部の主題のみを聴き、音高の違いによる印象の違いを発表。 ・各声部の出現を聴き、音高の違うものがずれて出現するときの印象を発表。 ・5・6 小節目の音階上行形を取り上げ、音高の違いと出現の仕方による印象を確認。 ②「音の密度や方向感覚」について ・5 小節目の音階上行形を通常の音価と 2 倍に伸ばした音価で比較聴取し、印象の違いを書き、発表する。 ・普通の提示主題と 8 小節目の提示主題を聴き、音価の変化による印象の違いを発表。 ・音価の変化による印象の違いを確認。	●音高の違う主題がずれて出現することが奥行き感に与える影響を感じ取らせる。 ○色の違うロープを使って説明する。 ○空間に透明なボックスを想像させる。 ●5・6 小節の 1 オクターブ以上離れている二つの旋律上行形が追いかける形で出現していることに気づかせ、それによる印象について感じ取らせる。 ●音価が 2 倍になることで印象にどのような変化を与えるかを感じ取らせる。 ●16 分音符が音楽の印象にどのような作用をもたらしているかを感じ取らせる。	②ア ②イ
	＜CD ジャケットの作成＞ 前回の学習を踏まえて13小節目以降にも着目させ、教材に対する解説文を書かせる(CD ジャケットのようなもの)。音楽の印象にどのような力や変化を及ぼすのかを記し、それらを総じて楽曲全体がどのような印象を持つ音楽であるかを述べさせる。	●必ず音楽の印象と楽曲の構造が一致した文章になるようにさせる。 ○文章を書くに当たって使用させたい例示をあらかじめ提示しておく。 ●部分的な解説と楽曲全体の視野の 2 つを獲得させる。	④ア
5 分	＜まとめ＞ ・数名の発表		

奥行き感の学習で、まず生徒たちに透明なボックスが目の前にあることを想像させた。その透明ボックスの中で音がどのように動いているかをイメージさせるのである。例えば高い音はボックスのどの位置で響いているように感じるか、低い音はどうなるか、またそれぞれの音は奥で響いているのか手前で響いているのか、というように位置をイメージさせることで構造的側面と感性的側面との結びつきを図

った。また音階のイメージについては数本の色違いのリボンを使って、その音階がリボンによってどのような形になるかを実演させることで、音形の具体的なイメージを持たせるようにした。このようにして奥行き感における要素を学習した後、それらを利用して CD ジャケットを製作する活動に入った。このとき机間巡視を行い、必要な助言指導を行った。また学習の最後には数名を指名して発表させた。その際、学習プリントを用意した。CD ジャケット制作活動における学習プリントは①を、フーガの構造及び奥行き感に関する学習においてはプリント②及び③を使用した。（資料参照）

6　実践結果・考察

ここでは生徒の学習プリントの記録結果を中心としながら考察を進めていく。具体的には「知覚と感受」の結びつきができているかということと、楽曲全体を把握できる「鑑賞の能力」の有無を見ていく。

6.1 知覚・感受の結びつき

まず「知覚と感受」の結びつきについてであるが、17 人の生徒が、私たちが期待する「両者がきちんと結びついてきると判断できるもの」で、残りの 17 人が、「両者が結びついていないと判断できるもの」であった。できていないと判断される生徒のコメントの特徴として、①構造的側面の欠落が 8 人、②感性的側面の欠落が 3 人、③両者の欠落が 6 人の③パターンが挙げられる。以下それぞれ細かく見ていくことにする。

＜両者が結びついているコメント＞

授業の本来の目的がきちんと達成されていると判断できるコメントである。大分すると次のようなものがある。

①音の動きから受ける印象・イメージ
・「音が高くなったり低くなったりして、音の響きが移動しているようだ」
・「音がどんどん上がると階段を駆け上がるように遠ざかって聴こえる」
・「音が上がるに連れて、だんだん音が遠くなっているように感じられる」

②音の高さから受ける印象・イメージ
・「同じメロディーでも高さが違うと自分のほうに近づいてくる感じがしたり遠くなっていく感じがしたりして、印象が変わる気がした」
・「音域が高い部分ではメロディーが空間の上のほうの手前で響き、逆に低い部分は空間の下のほうの奥で響いているような印象を受ける」
・「高い音は上のほうで響いている感じがしたり、低い音から高い音へ上がっていくのは、離れていくような感じがしたりした」
・「テーマがバスやテノールに現れるときは、奥の下のほうから力強く向かってくるようなイメージで、アルトやソプラノに現れるときは奥の上あたりから、軽やかに向ってくるようなイメージを受ける」

①に関してはおそらく 5・6 小節目のテナーとアルトの順次進行に対して述べたものであると考えられる。なぜなら、実際の授業ではこの部分を取り上げ、音が徐々に高くなっていったら印象がどのように変化するかということについて考えていったからである。②についてはキーワードに挙げたうちの「音の高さ」をヒントに生徒が考えたものといえる。以上のような「知覚と感受(原因と結果)」が結びつくようなコメントを数多くの生徒から見ることができた。つまり音楽の構造的側面の中でも「音の高さ」と「音の動き(音階的な順次進行)」に対する印象・イメージは比較的結び付けやすいものであることが分かった。

同じキーワードでも「音の長さ」「同時進行」に関するコメントは殆ど見受けられなかった。「テーマ」というキーワードは数多くの生徒が使用しているが、それはフーガの構造そのものを説明しようとするときに使用されることが多く、感性的側面とのかかわりの中で使用されてはいない。「ずれ」と「他の声部とのかかわり」に関するコメントは少々見受けられたが、「ずれ」や「他の声部とのかかわり」が具体的に書かれていないため、明確な理由付けが行われていないものになってしまっている。

またこのタイプのうち 4 人は第三者を意識したコメントを記述している。例えばこのようなものがある。

・「テーマがたくさんいろいろなところに出てきますが、それぞれ音の高さも違うし入り方も違うので、さまざまな印象を受けると思う」
・「音が徐々に低くなったり高くなったりするところが多いので、いろいろな感じ方をすることができる。感じ方は人それぞれ違う」
・「テーマが各声部に現れることにより、人それぞれ近くから聴こえるように感じる人や遠くから聴こえるように感じる人など、さまざまな方向から感じることができる」
・「高い音と低い音が近づいているようにも聴こえてくるし、遠ざかっているようにも聴こえる。高い音が上のほうから聴こえたり、低い音が下のほうから聴こえたり、人によって感じることがぜんぜん違う」

なぜこのような記述が見られる原因として二つ考えられる。まず一つ目としては CD ジャケット製作時において「友達とこの曲を知らない人に、『この曲はこういう曲だよ』ということを教えるつもりで、自分がイメージしたものを書いてみてください」と指示したことだ。これにより生徒は「曲を紹介する」ことに専念し、「自分のイメージ」という個人的な意見より万人に通用する公平な文章を書こうとしたと考えられる。

また二つ目は今回の研究は知覚と感受が結びついていることが目的であったことだ。重要なのは「なぜそう感じたのか」という理由付けが音楽の動きの中で行うことができることであって、感じ取った印象・イメージそのものは束縛してはならない。従って授業においては「感じ方は人それぞれだ」ということを強調した。このことが「自分のイメージ」を表現しないことに拍車がかかったものと考えられる。従って彼らに音楽の知覚と感受を結び付けて考えている力がないということではないことが分かる。しかしながら本研究における学習後の生徒の望ましい実態は、「一人ひとりが音楽から何かしらの印象を感じ、その理由を楽譜に書かれている事実を基に検証していくことができる」ことだ。私たちは CD ジャケット製作という設定にすることでより学習の成果を見ることができると考えていたが、結果的に「自分のイメージ」を表現しない現象が起きた。このことにより音楽の知覚と感受を結びつける授業においては CD ジャケット製作の課題そのものか設問の仕方に不適切であった可能性が出てくる。

＜両者が結びついていないコメント＞
①構造的側面の捉えが不十分なコメント

これは先の問題と大きく関わってくる。印象・イメージについてのコメントはあるものの、それが音楽の何によるものなのかが具体的に示されていないため、理由付けが曖昧になっているものである。つまり音楽の構造的側面をきちんと捉えていないという課題が浮かび上がってくる。例えばこのようなものがある。

・「他の声部とのかかわりによって、音に奥行きが出たり、せまり来る感じがよく出せたりすることができると思われる曲だ」
・「メロディーには奥行きがあり、自分の方向へだんだん近づいてくるように感じる」
・「ここで音が遠ざかっていった、ここで音が近づいてきたと、その場その場でイメージすることができる。音の高さが異なるので、いろいろな方向から音が響いてくる印象を受ける」

・「ずれや同時進行を使うことにより、音を立体的に聴くことができる」
・「前半と同じテーマがあるにもかかわらず、他の声部とのかかわりの中でまた違う印象を受ける」
・「ただ近づいてくるだけでなく、奥行きを持って近づいてくるということを感じさせる」

これらは全て音楽の動きの具体性に欠けている。原因と結果との関係で言えば、原因がきちんと示されていないため、結果に説得力がないのである。これは国語的な文章力の有無の問題ではなく、やはり音楽の構造的側面をきちんと捉えられていないことに原因があると考えるべきであろう。また音楽の構造的側面をきちんと捉えていないがゆえに、感性的側面も曖昧になってしまったものもある。例えば次のようなものである。

・「テーマを４つの声部に分けることで、曲を立体的に感じることができる」
・「音の高低によって奥行きを感じながら聴くと更に面白い曲である」
・「音の始まりや聴こえる感じなどで色々なイメージができる曲だ」

実際の授業において「立体的」「奥行き」「イメージ」という言葉は幾度となく使用した。しかし私たちはそれらを「遠く」や「近く」といった具体的な感覚を、音楽の動きを伴いながら使用するよう努めた。上記のコメントからは感性的側面に関する具体的な感覚が示されていない。このことより、やはり構造的側面への理解をもたらす授業の在り方がこれからの課題であるといえよう。

②感性的側面の欠落したコメント
ここでは逆に、構造的側面は押さえられているにもかかわらず、それが感性的側面と上手く結びついていないという問題がある。このタイプのコメントは<構造的側面の不十分なコメント＞と比較して極端に数が少ない。例えば次のようなものである。

・「4 つのテーマが空間の中を行き来して、音がそれぞれずれたり重なったりを繰り返している」
・「ずれて入っているところや高さが普段と逆になっているところがある」

彼らは彼らなりに何かを音楽から感じ取っているものの、それを上手くことが出表現することができない、もしくは感じ取っているものすら曖昧なもので、その正体を自分自身で明確化することができないのであろう。音楽を聴いても何も感じていないと考えるのは不適切であると思われる。上記のコメントも、音楽の動きをしっかりと捉えているので、もう一歩踏み込めば何かしらの印象・イメージとしっかりと結びつけることができそうな余地を残している。このことから、感じ取った何かしらの印象・イメージをより具体化させる手立てが必要であることが課題としてうかがえる。

③両者の欠落したコメント
ここでは学習のねらいを達成できなかったものについて、その原因をかんがえていく。若干名ではあるがここに分類される生徒がいる。彼らのコメントは以下のようなものである。

・「つかみどころがない曲である」
・「この曲が聴く人にどんな印象を与えたいのかが分からない曲である」
・「とても普通の人には思いつかない進行の仕方をしていて、バッハのすごさが分かる曲である」
・「ソプラノ・アルト・テナー・バスのそれぞれの音がきれいに混ざり合っています」

「どのように感じたのか」、またそれが「どうしてそのように感じたのか」という原因と結果が示されていない。従って音楽の知覚と感受を結びつけるという目的から見ると、やはり学習のねらいを達成でき

ていないといわざるを得ない。この原因として、授業自体のねらいを生徒がまだ完全に理解できていなかったことが考えられる。特に「奥行き感の学習」においては、音楽の構造的側面と感性的側面との結びつきを「音」によって感覚的に理解させることが大切である。音楽理論のように言葉によって理解するのではなく、実際に耳を使って何度も何度も繰り返し音を聴いて理解することが望ましい。しかしながら授業では、効果的に「耳」を使って感覚に訴えることに不十分さがあった。「音」を聴く時間を確保すること、しかもただ聴かせるのではなく計画的・意図的に聴かせるということは、最も大きな課題である。従ってその観点に立った授業構成そのものの見直しを図らなければならない。また学習のねらいを達成できていない生徒への個人的な指導の必要性も見受けられる。

6.2 鑑賞の能力について

これまでは楽曲の「部分」に関するコメントにスポットを当ててきた。次に楽曲の「全体」をどのように生徒が捉えているかについて考察したい。これはつまり「鑑賞の力」の有無に大きくかかわってくる。ここで求められる鑑賞の力とは、知覚と感受に基づいて音楽の一通りの流れを説明することができるかどうかの力である。

全体に関するコメントの量は部分に関するものと比較しても少ない。以下に紹介する。

・「曲全体としては意外とメリハリのある曲だ」
・「ソプラノがメロディーのところは明るくきれいな感じだけれど、テナーのときは悲しい感じに変わる。全体的にさびしい感じの曲である」
・「全体的には、どんよりとした曇り空のようなイメージが感じられる」
・「何かに引き込まれるような感じになる」

全体というものは部分を踏まえたうえで捉えられるものである。特に今回の教材は部分においてさまざまな表情をかもし出すので、一言に全体を示すことは難しかったであろうことが予想される。上記のコメントを見ても分かるように、彼らのイメージそのものは理解できるものの、その理由付けとなる構造的側面の記述が見られない。唯一「音のアップダウンが激しいところがあるため、頭の中のものがころころと変わって忙しい感じの曲とも思うが、ゆったりした感じのところもある」という記述が構造的側面に触れていると思われるものである。しかしながら「知覚と感受の結びつき」という目的に照らし合わせると、この「全体」を捉えるという学習においてはその目的を果たすことができなかった。従って鑑賞の力を育成するにはかなりの改善の余地があるといわざるを得ない。勿論私たちの指示・発問の仕方といった指導力にも課題があった。また限られた時間の中で鑑賞の力を育成するには無理があった。従って短い時間の中で知覚と感受の結びつきに基づく鑑賞の力を育成する学習のあり方が今後の課題として浮かび上がってくる。また知覚と感受における「鑑賞の力」そのものをもっと深化させて考えていく必要もあるだろう。

7　総括

これまでの考察をもとに、改めて今後の課題と改善の展望を整理していくと、次のようになる。

＜構造的側面と感性的側面を結びつけて「聴く」時間の確保＞

音楽の授業であるから、「音楽」が大切であることは明白だ。特に鑑賞活動は言葉に頼り、説明することに時間がかかり、「音楽」をきちんと聴かせる時間の確保が難しい。また聴かせる場所も授業のねらいや教師の意図によって異なってくる。「知覚と感受の結びつき」をテーマとするならば、やはりその曲を特徴付ける動きをする箇所を吟味し、そこで感じ取る印象・イメージを徹底的に深めていく必要がある。音楽の構造的側面は必要に応じて適切に指導しなければならない。網羅的にすべての要素を指導したと

ころで、肝心の感性的側面と結びつけて、「どのように感じるか」ということに着目させなければ意味がなくなってしまう。聴覚に直接訴え、感覚的に両者の結びつきを理解することが望まれるのである。

＜音楽の構造的側面の指導の強化＞

音楽の構造的側面は音楽理論と重なる部分が多く、音楽の専門的な教育を受けていない生徒にとってこの種の学習は苦痛を伴う。従って構造的側面の学習においては以下にこの苦痛を取り除くかが問題となってくる。これは教える教師側にとっての一つの命題とも言えるところである。これにおいてもやはり「耳」への働きかけが重要になってくるであろう。今回の授業で取り上げた音階が上行するとどのような印象の変化を感じるかという点について考えてみると、楽譜に書かれている通常の音価と、それを二倍にした音価で比較聴取した。このようにある音楽の要素に着目させたいとき、私たちは対となる二つのものを比較聴取することで構造的側面の説明をしていった。これ自体は適切であったと考えられるが、その要素が使われている箇所をもっと例示できれば構造的側面への理解はより深まったのではないだろうか。そもそも「音楽の知覚と感受を結びつける」能力の育成は長期的スパンで行われなければならない。今回の実践では時間的制約もあったため、構造的側面への指導に対する不十分さが否めないが、実際の学校現場では鑑賞活動を含めすべての活動領域において常に「知覚と感受」を意識させるように指導していかなければならないだろう。従って初期段階においては、さまざまに例を示すことによって生徒に構造的側面に対する見方に慣れさせる必要がある。ある程度慣れたところで生徒自身によって徐々に発見させ、感性的側面と結び付けていくように移行させるのが最も自然な流れであろう。

＜感性的側面の指導の強化＞

感性的側面が曖昧になってしまう理由の一つには、先の構造的側面をきちんと捉えていないことが挙げられる。その場合には前述の通り構造的側面をきちんと押さえた学習を展開する必要がある。しかし構造的側面を捉えていても感性的側面をきちんと表現できない場合がある。私たちは当初、構造的側面から理由付けをすることに多少の困難が生じたとしても、音楽から印象・イメージを表現できないことはないだろうと予測していた。従って少数ではあるものの構造的側面を捉えていながら感性的側面がきちんと表現できていないという事態は想定外であった。これを解決し、感じ取った何かしらの印象・イメージをより具体化させる手立てとしては、常に「何を感じるか」ということを問い続けていくことが考えられる。この場合でもやはり構造的側面の指導と同じようにいくつかのパターンを例示し、比較聴取しながら、感性的側面をそのつど感じ取っていくことが望ましい。従って構造的側面と感性的側面は常に表裏一体のもと指導を行わなければならないのである。

今回の実践で学習プリントにいくつかの「キーワード」を列挙したが、これらがすべて感性的側面と上手く連結して使用されたとは言い難く、使用されるキーワードにも偏りがあった。この点に関しては学習プリントにそれぞれのキーワードや比較聴取したときの印象・イメージの変化を書き込むスペースをとることで、構造的側面と感性的側面との関係を整理しておく必要がある。これにより両者の結びついた記述が容易に行えるようになるであろう。

＜課題の適切性＞

今回の学習の成果を見るために CD ジャケットの作成を行った。しかしながら第三者を意識するあまり「自分がどう感じるのか」についての記述がないものがいくつかあった。「感じ方は人それぞれだ」と言ったことも原因の一つではあるが、この課題そのものの適切性についても吟味する必要がある。そもそも CD ジャケットは第三者を意識してかかれる「解説書」である。ただ単純に CD ジャケットを書きなさいと指示したら、今回のようにいくら「自分の感じたことをもとにして」と付け加えたとしてもあまり効果がない。むしろ「あなたはこの曲をどんな曲だと思いますか」というように、学習者自身が主体であるということを意識させる課題の提示を行うべきだったであろう。「知覚と感受」においては「人がどう感じるか」ではなく「自分がどう感じるか」が問題であり、その理由を音楽の動きの中から自分なりに見つける

ことが求められている。「誰かに説明するように」という設定にすることにより幾分書き易さを与えるであろう。しかしそこで自分自身のイメージがかかれていなければ学習の意味がなくなってしまう。「知覚と感受」においてはシンプルに問いかけるほうが効果的ではないだろうか。

＜「鑑賞の能力」を育成するための指導＞

楽曲の「部分」は抑えられるが「全体」を捉えるということは生徒たちにとって難しいものであった。確かにさまざまな表情を持つ「部分」を一つにまとめることは大変な作業である。しかし鑑賞授業を行うのであれば、鑑賞の能力を育成するのは必須のことである。特に知覚と感受の問題においては、音価・音高・音域・音の動き・ずれ等の奥行き感を感じさせる要素を十分に生かしながら行わなければ意味がない。そのためには曲を順に追いながら、奥行き感を感じさせることができるポイントを生徒全員で確認する作業を十分に行わなければならない。こうすることにより「部分」が明確になるばかりではなく、その「部分」をつなげて「全体」へと視野を広げていくことができる。ただ奥行き感を感じさせるポイントというのは教材によって異なってくるので、事前の教材研究は綿密に行わなければならないし、それに見合う学習プリントも準備しなければならない。

8　終わりに

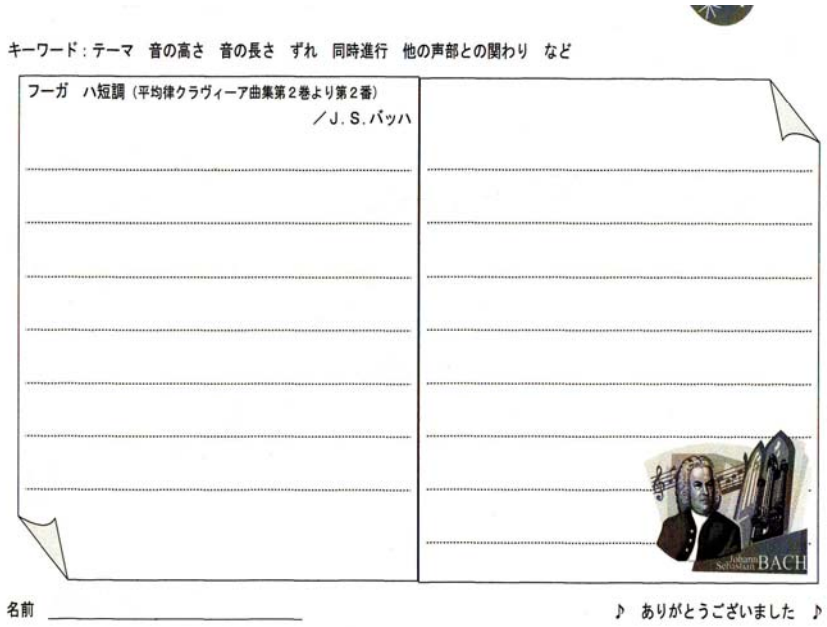
今回の授業実践で実感したことは、結局、構造的側面の指導も感性的側面の指導も、普段の授業の中で常に問い続けることに意味があるということだ。ほんの数時間で身につく力ではない。常に問い続け、生徒たちに両者の結びつきを意識させる授業が「鑑賞の能力」の育成につながってくるのである。これまで私たちの中でも知覚と感受を結びつけた授業の必要性は十分感じていた。しかしそれをいざ実行してみるとさまざまな障害があり、そのたびに音楽を教える難しさを味わった。また現段階では「音価・音高・音域・音の動き・ずれ等」といった要素に基づくものであり、これらはいわばアウトラインでしかない。従ってこれらが知覚と感受を結びつける普遍的要素であるとは思っていない。今後の研究ではこれまでで明らかになった課題を授業作りにおいて役立てることと、知覚と感受に基づいた「鑑賞の能力」を更に具体化することにあるだろう。

なお県立南高等学校青柳秀昭教諭には大変お世話になった。協力に心から感謝の意を述べたい。

（平成 20 年 3 月 21 日受理）

＊資料（学習プリント）

・プリント①



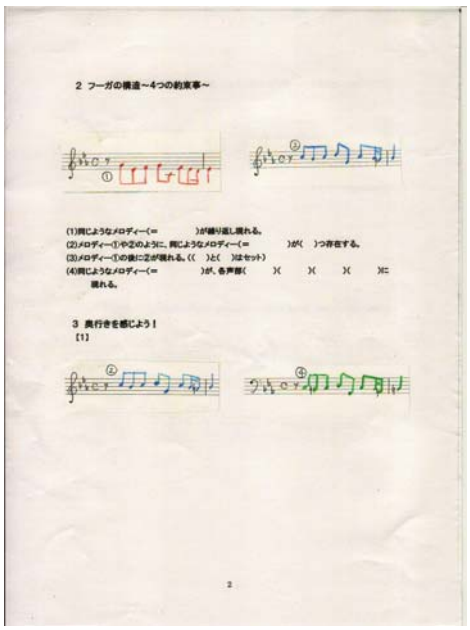
キーワード：テーマ　音の高さ　音の長さ　ずれ　同時進行　他の声部との関わり　など

フーガ　ハ短調（平均律クラヴィーア曲集第２巻より第２番）
／J．S．バッハ

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

♪ ありがとうございました ♪

・プリント②

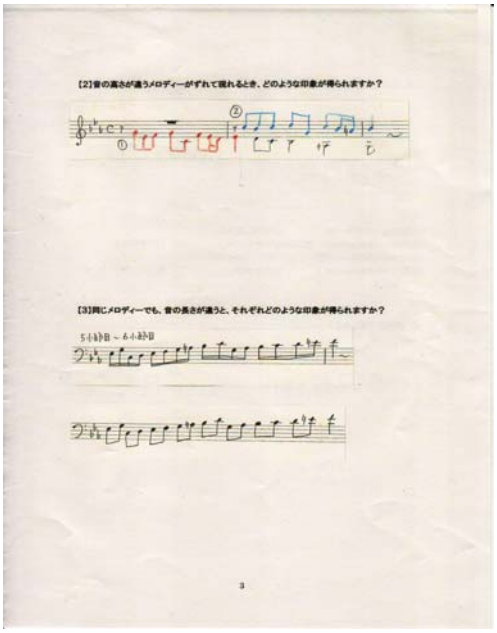


2 フーガの構造～4つの約束事～

(1)同じようなメロディー(＝　　)が繰り返し現れる。
(2)メロディー①や②のように、同じようなメロディー(＝　　)が(　)つ存在する。
(3)メロディー①の後に②が現れる。((　)と(　)はセット)
(4)同じようなメロディー(＝　　)が、各声部(　　)(　　)(　　)(　　)に現れる。

3 奥行きを感じよう！
【1】

・プリント③



【2】音の高さが違うメロディーがずれて現れるとき、どのような印象が得られますか？

【3】同じメロディーでも、音の長さが違うと、それぞれどのような印象が得られますか？